

礼拝

令和4年2月14日
11号



大島徹水先生からのメッセージ

～ 陰徳と積む(いんとくをつむ) ～

本日は、涅槃会（ねはんえ）の法要をお勤めました。旧暦の二月十五日はお釈迦さまがお亡くなりになられた日とされており、お供えものをしてお勤めをする儀式を行います。涅槃とはインドの言葉「ニルヴァーナ」に音のまま漢字を当てたもので、「吹き消す」という意味があります。つまり、煩惱や妄想が吹き消された覚（さと）りの境地を意味します。お釈迦さまが亡くなられる直前、弟子たちへの最後の説法として「自らを灯明として自らを抛り所（よりどころ）とし、法を灯明として法を抛り所とし、他を抛り所とすることなかれ（自燈明・法燈明）。」

というお話をされました。自分が学んだ正しい教えをもとに、正しく生活すること、正しく人と接することが大切であるとの教えでありました。本校の建学の精神である「三宝帰依（さんぼうきえ）」そしてその解釈としての校訓である「謙虚にして真理探究・誠実にして精進努力・親切にして相互協同」はまさにお釈迦さまの教えであり、明るく・正しく・仲良く生きる社会をつくる人になって欲しいという本校の願いであります。

前回の宗教礼拝では大島忌の法要をお勤めしました。第三代校長の大島徹水先生は常の言葉として、「陰徳を積め。他人が知ると知らぬと、そんなことはどうでもよい。良いことはつとめてしなさい。」と生徒たちに語りかけられていたそうです。

この「陰徳」という言葉は、中国のさまざまな思想をまとめた書物である淮南子（えなんじ）に見ることが出来ます。淮南子は、日本書紀の神話に引用されたり、「人間万事塞翁が馬」の典故として有名な書物ですが、その中に「有陰徳者必有陽報（陰徳ある者は必ず陽報あり）」と記載されています。人知れず良い行いをすれば、必ず良い報いがあるという意味になります。ここで大切なのは、陽報を期待した行いは、陰徳を積むこととは全く逆の行いであると理解しておくこと

です。陽報を期待せず、他人が知ろうが知るまいが、自分の利害に関係なく、自分が良いと思うことや他の人のためになると思うことを素直な気持ちで実践していくことが陰徳を積むことなのです。さらに、深く捉えると、積極的に良いことをしないうまでも、自分が悪いことをしないうことで、結果として良いことを行なったことになるという考え方もできます。電車でお年寄りに席を譲るといった、自分が良いと思つたことを積極的に行うことも尊いのですが、例えば「もしかしたらここに誰か座るかもしれない」と思いを巡らせて、はじめから座らずに立っているような行いも結果的に良い行いとなり、特にこのような行為を陰徳という考え方もあるそうです。

ある記事に「最近の世の中は、陰徳を積むことを忘れて、直接的利益や短期的数字のみを評価の対象として、ガツガツしている経営者が多い。自分だけがもうけようとして業績が悪化する。経営者は自己保身に走るため、信頼関係も築けず悪化の一途をたどる。」とありました。間もなく学年がひとつ上がり、年度がかわれば「先輩」になります。上の立場になると、してあげているという感覚が出やすくなるそうです。だからこそ「陰徳を積むことを心がける」ことで、強い信頼関係を築いていきましょう。